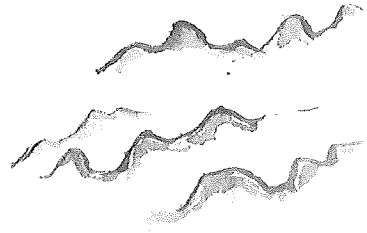
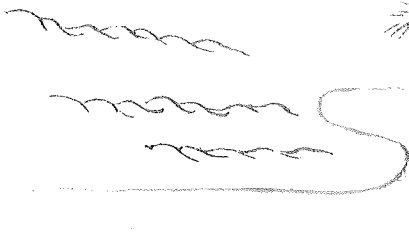


ロータリーに於ける大乗之道・小乗の道



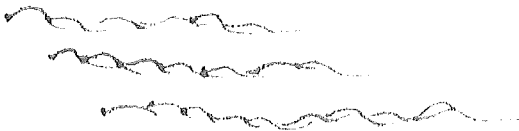
佐藤千壽





ロータリーに於ける大乘之道・小乗の道

たかこ



題字·裝畫——著者

〔ロータリーに於ける大乘の道・小乗の道〕

目次

はじめに　―自序―	5
ロータリーに於ける大乘の道・小乗の道	8
指導者の資格　―追録―	32
あとがき	38

はじめに

— 著者自序 —

この度思いがけず、第二七九〇地区市川東ロータリー・クラブの創立三十周年祝典で記念講演をする機会に恵まれました。それも他ならぬ畏友土屋桑堂学兄の御配慮があつてのことですし、また千葉県は我が父祖の地という浅からぬ御縁もある為、改めて想を練り、その責を塞ぐべく蕪辞ぶじを連ねたのが、この草稿であります。

そういうわけで、これは未発表の書下ろし草稿ですが、顧みて身の程知らぬ浅見独断と僭越な言辞もあり、また人によっては、「何もそこまで齒に衣着せず物言わずとも……」と違和感を覚えられるかも知れません。

然し愚生はロータリー生活四十年にして、今日この国の現状を見、痛憤たがまの昂り抑え難きものがあるのです。折しも去る四月、歴代R・I会長の中でも傑出した巨峰、ビル・ロビンスが亡くなりました。ロビンス会長のもとで、その透徹したロータリー

哲学に心酔し、固い友情の絆をもって共に奉仕の道を語り合つた我々ガバナー同期生二十一人も、今や残るはわずか四人―その中の毒舌憎まれっ子一人、即ちかく申す愚生であります。

その愚生も、今年齡八十を數えることになりました。愚生が胸中に鬱積する憂憤の情を、ここに吐露すべきか否か、敢えてこれをビルに問えば、彼は即座にこう答えるに違いありません―黙っている善人は悪魔の味方だ。誰になんと言われようと勇氣を持つて発言しなさい。良いことは良い、悪いことは悪いのだ……そしてまた恐らく、ここに述べられている愚見にも双手を舉げて賛成し、全面的にこれを支持してくれることでしょう。ロータリーに関する最初の拙著『ロータリーは人を作る』は、愚生がガバナー終任直後に出版したのですが、ビル会長はこれに対して、欣然自ら韻律高い序文をしたため、その巻頭を飾ってくれました。

今日ロータリーの大勢から見れば、ビル会長はやはり正統少數派でした。この冊子に盛られている愚見もまた少數派に属するものでしょう。然し大勢に順應する言

葉なら、何も今更改めて屋上屋を重ねる必要もありません。少數意見なればこそ冊にでもまとめて後進に残したいと思えます。頑朴魯鈍、青衿の志から一步も出られない愚生としては、螳螂の斧と嘲られようと、それより他に道は無いのです。

少數にて常に少數にてありしかば

ひとつ心を保ち来にけり

―土屋文明―

佛門の高僧には遺偈、あるいは遺誠というものがあります―遺言として後進に残す訓告ですが、友情に支えられてここに上梓して頂く蕪冊は、身に餘るロータリーの恩恵を享受して来た八十老翁が、敬愛する諸兄に贈る遺典となるでしょう。

一九九八年孟夏

仝壽石洞学人謹誌併而ビル・ロピンス翁の靈に捧ぐ 合掌

ロータリーに於ける大乘の道・小乗の道

創立当初のロータリーが、会員同士の親睦と職業上の互恵取引を目的にしていたことは既に皆様御存じだと思います。然し創立一年後には、自分達仲間内だけの商賣をうまくやろう、というに過ぎぬのでは社会的存在意義が無いと覺り、地域社会に対する責任という條項を採り入れました。それから更に二年後の一九〇八年に、チェス・ペリーとアーサー・シエルドンが入会し、ここに初めて今日のロータリーの原型が出来上ったのです。即ち國際ロータリーという組織の骨格を作ったのが、チェス・ペリーであり、その組織に生命を吹き込む精神的骨格を作ったのがアーサー・シエルドンであります。そのシエルドンの提唱したロータリーの精神とは何か——それは一九一一年の第二回全米ロータリー連合会で発表された彼のメッセー

ジ：「經營の科学とは奉仕の科学である―最もよく奉仕するものが、最も多く報われる・He profits most who serves bestなのだ」という一語に盡きます。そこで、その精神を体现する組織の骨格は？と問われれば必然的に「奉仕する職業人のクラブ」ということになるわけで、ここからロータリーは數ある他の社交クラブ、親睦団体と明らかに違う独自の道を歩み始めることとなります。

ところで、シェルドンの提唱する「經營の科学」としての奉仕^かということは、当然自分の携わる職業・事業^かに関わることでですから、結局各個人の倫理観に帰着致します。そしてこの倫理観を、ロータリアンはかくあるべし、という具体的行動規範にまとめあげたのが、一九一五年に採択された「ロータリー道徳律」であって、これが一層明確にロータリーの志^{こころざ}す奉仕^かとは何であるか、という道筋が示されたわけでありませう。

然し一方、クラブの社会的存在意義という点で、そういう個人的な道徳論^{あきた}に慊^{あきら}らぬ人が出て参ります。その点で最も尖鋭な批判の狼煙を上げたのが、テキサス州ヒ

ユーストンの会員メルヴィン・ジョウンス＝Melvin Jones＝で、彼は、奉仕の実践とは抽象的観念的な道徳論ではなく、現に今さまさまの面でお金を必要としている人達に対し、金銭的に援助の手を差し伸べることだ、と確信し、一九一七年、新たにライオンズという奉仕クラブを設立しました。こゝに“*I serve*”という理念のロータリーに対し、明らかに違った道を示して“*We serve*”と叫ぶ今日のライオンズ・クラブが誕生したのであります。

なお、これに留まらず、この問題はその後もロータリー内部で燻り続け、早くもその翌年、一九一八年にオハイオ州エリリア・ロータリー・クラブが設立されるや、これぞ絶好の機会とばかりエドガー・アレン＝Edgar Allen＝という人物が入会してきて、一舉に大論争の火が燃え上がりました。アレンはかねがね身体障害児救済問題に深い関心を持っており、これこそロータリーの様な奉仕団体が取組むべき緊急の課題だとして積極的に各クラブに働きかけ、一九二二年のロスアンゼルス国際大会で決議案を採択させることにも成功しました。ところが、これが却って火に油

を注ぐそそ様な結果となつて、ロータリーの基本理念を守ろうとする人達との大論争になり、ロータリーもあわや空中分解するかと危ぶまれる程の騒動になったのです。

そして、もうどうにも収拾つかぬ様な状態にまで追込まれた時に出てきたのが、翌一九二三年のセント・ルイス大会で採択された、あの歴史に残る名宣言・「決議23-34」なのであります。(拙著・『私本・人作りロータリー』-「決議23-34成立の経緯」

参照)

「セント・ルイス宣言」という別称まであるこの名決議の眞髓は、改めて今更言うまでもありませんが、「根本問題として、ロータリーは、自己のために利益を得ようとする欲望と、他人に奉仕しようとする義務感と、それに伴う衝動との間に常に起こる争を和解させようとする人生の哲学である」という一節に凝縮されている、と言つていゝでしょう。従つてこの決議は、その劈頭第一番に、「ロータリーに於て社会奉仕とは、ロータリアンすべてがその個人生活、職業生活、及び社会生活に奉仕の理想を適用することを鼓吹かつ育成するにある」と謳い上げ、そしてまた

「ロータリー・クラブの社会奉仕活動は、ロータリー・クラブの会員を、奉仕という点で訓練しようとする実験としてのみ考慮せらるべきである」と釘をさしているのであります。

ここから明瞭に読み取れるのは、ロータリーの奉仕とは、会員一人一人、各個人の問題である。会員一人一人を奉仕献身の、より良い人間に育て上げるのがクラブの責務であって、ロータリーが提唱する様々なプロジェクトは皆その為の実験手段に過ぎない、という基本精神です。即ちロータリーの精神的骨格が、アーサー・シエルドン入会後十五年の波瀾試練を経て、ここにしっかり固まった、と云っていいでしょう。

ロータリーの議論でも、「原点に還れ」という言葉が繰返し使われますが、然らばその原点とは何か、となるとどうも曖昧になってしまいます。然し私をして言わしめれば、ロータリーの原点は正にこの精神的骨格が完成した一九二三年にあるのです。「決議23―34」はロータリーアンたる者反覆誦和すべき聖典でありましょう。

こういふわけで、少くも尔来半世紀、私がガバナーに就任する頃までのロータリーは最も優れた人生教室として尊敬と羨望の眼で見られていました。私がガバナーを勤めた一九七四〜七五年度の国際ロータリー会長は、つい先頃、四月二十三日に八十七歳で亡くなられたWilliam Robbinsですが、彼は「ロータリーは成人教育の最もすぐれた実験場だ」と言い、「より良き世界への第一歩はより良きあなたであり、より良き私である」と国際協議会の壇上から私達に語りかけてきました。そして「ロータリーの第一の目的は人を作ることである。ロータリー・クラブの価値は、そのクラブが如何なる人を作ったかによって計られる」、と全世界から集まったガバナー・ノミニニーを鼓舞激励したのであります。

然し、僻目かも知れませんが、ロータリーもこのあたりが頂点で、国際ロータリーという中央本部自体が直接多くの奉仕プロジェクトを手懸ける様になり、またそれに伴う財政事情から拡大会員増強が重点課題になって来るに従って、ロータリーも急速に変質してきました。また不思議な因縁と申しましょうか、それまで二十五年

間続いたレーク・プラシッドという鄙びた静かな環境での国際協議会も、私共の時間が最後になりました。「居は氣を移す」という『孟子』の言葉もまたこれで実証された様です。

こうして今やロータリーの活動も限りなくライオンズに近付き、公然とライオンズとの協同プロジェクトまで語られる様になったのです。そうならば当然「人作り」などという使命は第二義、第三義の問題として軽視され、要は如何にして“we serve”の輪を拡げるかで、その為の拡大と財政基盤確立こそ重点目標となってきました。これはもう是非の論を超越した時の勢とでも申すほか無いでしょう。

さてここで、一寸話題を変え、皆様に考えて頂く教材として、日本人に一番親しみのある佛教という国際的宗教教団のことをお話致しましょう――

釋尊が亡くなられたのは紀元前三百八十三年頃とされていますが、その後も残された弟子達によって佛教教団はどんどん膨張してインド各地に拡がってゆきます。

そういう過程で教典や戒律の整備も進んでゆくのですが、佛敎者として修行上固く守るべき規範としての戒律については屢々議論の種になりました。なお戒とは、在家出家を問わず佛敎者としての基本的な心構え、即ち日常の生活姿勢に関する規範で極めて道徳的な戒めですから、建前としては少くも不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不飲酒の五戒ぐらゐは厭だと言えないでしょう。然し律の方は出家者の為の細かな規定で、敎団の運営規則まで含んでいますから、その解釋、運用をめぐって対立が生じます。これが佛敎界に各分派が出来るもとで、早くも佛滅後百年程経った頃、東インドのヴァイシャーリーで律をめぐる大論争がありました。然もその発火点になったのが、信者から金や塩を集めてこれを分配し蓄えるという様な反律行為を、ヴァイシャーリーの僧侶達がやっていた、という事件なのですから、これは意味深長、興味深いことです。そこで律檢証の為、東西インド各地から代表者が急遽招集されて大集會が催されました。結集けっじゅうと称しますが七百人の比丘びくが參集したので七百結集とも呼ばれます。結集けっじゅうとは釋尊の没後古代インドで弟子達が集って、

それぞれの記憶にある釋尊の教説や戒律を合唱し整理した学界の様なもので、このヴァイシャーリーの結集は二回目なので、正式には第二結集と記録されています。ところが、この席での論争が、遂に教団分裂という事態にまで到った為、第二結集は佛教史上の劃期的大集会となりました。

私はこの道の専門家ではありませんから、学問的、哲学的に体系立て、対立する双方の論点を説明出来ませんし、また皆様にとってそれ程興味もないと存じます。要するに、素人耳に一番解り易く説明すれば、一方はあくまでも教祖釋尊の教えと、その当時定められた戒律を厳しく守り、徹底的に修行を積んで悟りの境地に到る——というのが僧院の本来あるべき姿だ、という主張であり、他方は、そんな自分一個の人間完成を目指すのではなく、広く大衆に教えを広め苦惱する衆生を救い上げるのが宗教人の使命で、その為には時と所によって戒律も変っていい。時代と共に手法を変えてゆかなければ教団の維持も出来なくなる。あなた方の主張は自分の悟りで満足している小さな乗物みたいなものだ。然し我々の考えは、広く大衆と共に

進もうという大きな乗物なのだ……ということです。

大乘佛教・小乗佛教という相對する二つの呼称はここから生まれたのですが、小乗という言葉は、佛教界に新しく登場した後進の比丘達から守旧派の長老達に投げ掛けられた蔑称だったので。従ってそういう差別用語を使わずに分類すれば、長老派は上座部、新興の革新派は大衆部と呼ぶべきでしょう。ともかくここで佛教教団は二部に分裂し、その後各部内で分派を生みながらも根本二部のうち、上座部は南進して今日スリランカ、ビルマ、タイ等に普及している南方佛教となり、大衆部は北進して中央アジアから中国、朝鮮、日本へと伝わった北方佛教として榮えて来ました。従って北方佛教は殆ど皆大乘派なのです。

然し「大衆を等しく救い上げて進む大きな乗物」と誇称した大衆部は、その柔軟な姿勢によって教団を拡張して行きますが、その反面、次第に俗化して墮落してきただことも事実です。僧侶は自分自身が厳しく戒律を守り、人格を磨き、法を説くことによって大衆を教化すべきなのに、今や日本では大部分が単なる葬式佛教になっ

てしまいました。

先程、佛教教団分裂の発火点になったのが、蓄財に勵んだヴァイシャーリーの僧院だったという話を話しましたが、大衆部にはその発端からして既に財宝誘惑の萌芽があつたのです。勿論、坊さんとて霞を食って生きてゆけるものではありませんから、当然財政問題にも関心を持って然るべきでしょう。然し本来の使命が何であるかを忘れ、組織の膨張拡大に狂奔して人作りを疎かにすれば、やがてその組織自体が内部から崩壊します。大衆と共に、などという美辞麗句には、そういう危険な落とし穴があるのです。

ともあれ現代日本の佛教界には、学識、人格、識見すぐれた高僧も居られますけれど、それは宗派としては大乘派に属しているものの、生活姿勢の面から見れば長老派上座部に等しい、と言っても良い少數派です。一方、小乗と批難された南方佛教の僧侶には、持戒厳しく禁欲精進の姿勢を貫いている者が多く、広く民衆の尊崇敬慕を受けて居ります。どちらが本当に衆生済度の実績を示しているか、改めて考

え直す必要があります。

汝が求める光は汝自身から：汝自身を輝やかせ……求道の人は何よりも先ず自身自身が涅槃に到る道を求めよ……そうすれば、その人自身から発する光が千里の道を照らし、衆生を済度することが出来るのです。そういう精神的な自利の道はそのまま結果的には利他の道に繋がるのです。ところが一方、大乘という名目的な金看板に安住して、自分自身の魂を洗うことを忘れ、たゞ物質的な自利を求めているのが日本佛教界の現状ではないでしょうか。醜い権力争い、派閥争動、脱税問題等枚擧に違ありません。いかがわしい新興宗教が隆盛を極めて社会問題化するのも、また道德の頹廢、青少年非行の増加にも既成宗教の怠慢・墮落に一斑の責任があります。

「権力は墮落する」という格言がありますが、組織も膨張拡大して権力化すれば間違無く墮落します。大乘Ⅱ大衆部はその甘美な理想のもとに、広く世界宗教として発展拡大し、一方、小乗Ⅱ上座部は宗教者としての原点に固執するあまり、南ア

ジアの限られた地域にしか根付きませんでした。然し現時点で、果して何れが民衆にとって心の糧になっているでしょうか。社会の安寧幸福という観点から考えて何れが本当に価値ある存在なのか、改めて問い直してみる必要があるでしょう。

企業の世界に於てさえ同じことが言える時代になりました。商品の規格とか、取引の規準とか、そういうものは世界中何処でも通用するものでなければなりません。企業が、企業自体の規模が国際的な大組織である必要はなくなりません。各地方に根を下ろして独自の商品を創出する中小企業が、必ずしも国際的大企業より劣っているとはいえないでしょう。どちらが市民生活を豊かにし、人々に仕合わせをもたらすか、今やそれが問われているのです。

企業でさえそうだとしたら、まして世界宗教が民族宗教より上位にあるなどとは言えなくなります。

さて長々と佛教教団の二つの流れについて駄弁を弄しましたが、この佛教界に於

ける大乘・小乗の図式を下敷にしてロータリーを考えてみてはいかがでしょうか。

佛教の歴史は二千四百年、ロータリーは近々百年足らずでも比較になりませんが、それでも佛滅後凡そ百年程経った頃から教団内に大きな対立が生じ、そこから大乘・小乗という二つの部派が出来たという点は、ロータリーに於ても大いに考えさせられるものがあります。また大乘佛教が中国に於ても日本に於ても、幾多のすばらしい大宗教人を輩出し、その高邁な思想と強烈な吸引力によって世界宗教と誇るに足る大教団を築き上げてみたものの、やがてその先達の權威を笠に着て俗化墮落の一途を辿ってきた、というこの史実も、百數十万の会員を擁する世界的大奉仕団と自負する国際ロータリーの現状と重ね合わせてみれば、何か他人事ひとごと無らぬ気がするではありませんか。

あるいは牽強附会の独断かも知れませんが敢えて言わせて貰えば、ロータリーの精神的骨格を作ったアーサー・シエルドンは上座部長老派の筆頭であり、ライオンズを創立したメルヴィン・ジョウンズは大衆部大乘の先駆者でありましょう。従っ

てライオンズから見れば一九一五年の「ロータリー道德律」の如きは長老派の信奉する小乗律だということになります。「決議23―34」は大乗と小乗の折衷論ですが、根底にある精神的骨格はあくまでもロータリアン個人に重きを置いた上座部思想であります。

そもそも古代佛教教団の結集は、ロータリーで言えば規定審議会としての役割を持っており、ここで大衆化路線と長老純潔保守派との対立が生じて、大乗・小乗の二部に分裂したことは先程申し述べた通りです。そして時と共に大乗の勢力が強くなってゆくのですが、ロータリーでも同様で、より多くの会員を、という大衆化路線で年毎に規則は緩やかになります。クラブの地域制限・職業分類・出席規定・年間例会数……次々大衆部の勝利です。

然しそれでも、職業奉仕こそロータリー存立の基盤だとする信念に揺ぎ無い限りは、まだここに上座部の哲学が立派に生きている、と言っていいでしょう。何故なら職業奉仕とは、会員一人一人が自分の職業の倫理的水準を高めることによって社

会に貢献せよ、ということであって、帰する所會員個人の人格陶冶、自己鍊成に外無らぬからです。

こういうわけですから、私共の信奉するロータリーは成人教育の場であり、人作りを使命とする人生学校でした。ところが組織の拡大と奉仕プロジェクトの多様化に伴って、自分の職場などという小さな舟より、世界の海を航海する大きな舟の方が大事なのだ、という思想に変わってきました。その大義名分はまことに立派なもので極めて大衆受けするものですが、そこには先程申し述べた大乘佛教の俗化低落、倫理の崩壊、と軌を一にする危険因子が潜んでおります。

第一の危険は職業倫理の崩壊・第二の危険は自己顕示欲・第三の危険は金銭感覚の麻痺汚染・です。これはもう三つ共、単なる危惧杞憂ではありません—今やこうした罪業が我々の身近に続発してはおりませんか。嫌われるのを承知で敢えて具体的に申し上げましょう—

第一——連日新聞で報道されるあの金融証券の不祥事は一体何ですか。いや更に

遡って八十年代の泡沫景気を演出したあの企業行動を、職業倫理に照らしてどうお考えですか。然もこういう反倫理的企業の首脳部は、殆ど皆ロータリーの会員なのです。

世界中のポリオを撲滅するとか、地球上に飢餓と貧困を無くするとか、壮大な企画をぶち上げて職業奉仕をないがしろにした結果がこれです。

第二——人間は誰でも多かれ少なかれ、名譽欲・自己顯示欲を持って居ります。

それは生きる証あかしですから、その限りに於ては悪いことではありません。然し神明に誓って愧じぬ本当の名譽とは何なのか：それを見誤ると大変なことになります。名譽ある生き方とは富でもなければ勲章でもない……然らばそれは何か？……「人は如何に生くべきか。悔無き人生とは何なのか……」——日々不断に自らそれを問いかければ、人各々その答が出てくるでしょう。その答を導き出すのがロータリーの人作りです。

ところが近年のロータリーは、会員増強や財団寄附の數字で会員を激勵し、名譽

称号の撒き餌を使う様になりました。職業奉仕がロータリーの根幹なら、職業人としての倫理こそ名譽の尺度となるべきものでしょう。然し職業奉仕は目に見えぬ陰徳であり、またロータリーの財政に寄与するものでもありませんから、事業組織化したロータリー本山からすれば無用の長物です。本山の方針がそうなると、末寺の任職たるガバナーも「人作り」などという固苦しい説法をするよりも、専ら信者獲得、寄進勸奨の行脚に精出す様になります。どのガバナー月信にも今や口に苦い良薬は見当らなくなりました。然し時節柄それは致し方ないとしても、自己顯示欲で月信を自己宣伝広報に利用したり、自分の記念寫眞集にしたり、というのは困ります。自費でやるなら御自由ですが、多額の公金でなすべきことではありません。特殊な事例とは言え、こんな事態が出現するのは何故でしょうか。

第三——金は魔物です。「宝を地に積むな・宝を天に積み」というのがイエスの教えだったはずですが、ローマ・カソリック教会も權威を笠に着て組織を膨張拡大させてくるに従って墮落の途を辿り始めました。過酷な宗教税でも足りず、遂に教

会建設の資金集めに免罪符を發行するに到って、ここに宗教改革の火の手が上りま
す。そうしてプロテスタントという新興宗派が誕生するのですが、先程述べた様に、
日本佛教界の墮落も、結局は金という魔物に取り憑かれたからです。金高によって
等級をつける戒名料などというのは、正に免罪符そっくりでありませんか。ロータ
リー財団寄附者の等級別名譽称号も免罪符的発想でしょう。

たしかに大乘佛教の大衆部思想には俗化の落し穴があります。然し強烈な個性を
持つ傑僧に恵まれた昔の佛教界はその落し穴を回避してきました。

例えば曹洞宗も大乘の系譜に繋がる宗派ですが、日本の宗祖道元は、弟子の玄明
が時の執権北條時頼から寺領寄進を受け、喜び勇んで帰ったところ、譽めるどころ
か烈火の如く怒って破門してしまいました。

臨濟宗の大燈国師にも――汝等諸人此山中に来て道どうの為ために頭こゝろを聚あつむ 衣食の
為ためにすること莫なれ……云々……∨・―という遺誠があります。

片しや只かん管た打た坐ざ・片しや公案提唱たいたうという手法の違いはあっても、専ら自己鍊成じこれんじやう・修行

一筋という姿勢です。必ずしもすべてそうだとは言いませんが、今の佛教界の大勢はこういう基本的な人作りを怠って金儲けに傾斜しておりますし、またこれを本来のあるべき姿に建て直す傑出した指導者も居りません。

ロータリーでも同じことが言えます。毎週の例会が果して人作りの道場になっているでしょうか。話題は殆ど会員増強と財団寄附、そしてお楽しみはゴルフ……問題の根は、当初会員訓練の手段とされていた奉仕プログラムが独り歩きして、結局それ自体が目的化してしまった所にあります。

人間の営みはまことに愚かしく悲しいもので、何事でも目的と手段が顛倒してしまい勝ちです。続発する企業不祥事も結局手段が目的化して独り歩きした所から発生しました。

ロータリーもこういう世間一般の風潮に毒されて、手段であるべきお金が目的になり、段々金銭感覚が麻痺してゆきます。ロータリーに対する忠誠は、お金という物指によって計られるのです。その結果、ロータリーでもまた、行政府が毎回会計

検査院から指摘されているのと同じ様な事態が発生し始めました。何と驚くべきことに、公私混同・不正会計処理で、地区資金を浪費しながら、他方ロータリー財団に冠名寄附をした、という様な役員さえ現れたのです。自己顯示欲の末路です。

どんな仕事をするにも、また慈善奉仕をするにも、お金はたしかに重要な手段です。然し次の点だけはしっかり心に留めておいて頂きたいと思います。

国民の税金で、国民生活向上の為に働くのが政治家と役人・檀信徒の布施で檀信徒に心の糧を与えるのが宗教家・自分の金Ⅱつまり自腹を切った金Ⅱで利害関係の無い他の人々に奉仕するのがロータリアン——

この定義に照らしてみた時、今申し上げた様な地区資金処理をどう評価されますか。この様なことは、ロータリーの名譽の為、誰しも内密にしておきたいでしょう。そして冠名寄附という徒花あだばなの記録だけが残されることとなります。然し本当にそれでいゝのでしょうか。地区資金は自分のお金ではありません。地区内全ロータリアンが地区運営の為に拠出した公金です。その用途は政治家以上に清潔でなければな

りません。自分の名譽欲の為に使うなら、その金は自腹を切るべきでしょう。他人の禪で相撲をとってはいけません。

そういう論拠として、くだい様ですが、もう一つ肝腎な点を胸に納めて下さい。政治家も役人も、宗教家も、それはその人の職業です。だから職業活動の為の必要経費も、自分の給料も、すべて他人の懐に依存していき。然しロータリーに於ては専属職員以外、理事でもガバナ―でも皆無償の奉仕をするボランティアです。勿論一人ですべての奉仕費用を賄うなどということは出来ませんから、国際ロータリーもそれに見合う予算を割当て、地区もまた会員が人頭割で資金を拠出します。然しR・Iまたは地区で正式承認された使途以外、または自分が良しとする政策上、予算を超過する様なことになれば、当然それは自分の懐勘定で処理しなければなりません。まして交際費の如きに到っては当然個人負担すべきものです。ロータリーは職業ではありません。ロータリアンは、ロータリーという人生道場に行つて自分が勉強するのですから、授業料を拂うのが当然ではありませんか。ところが今やロー

タリーが大衆部思想で巨大化し、巨額の金が動く様になった為、本来のロータリー魂が汚染され、ロータリーが職業化されてきました。ここにロータリーの危機があります。私は理想としての大乗的ロータリー観を否定するものではありません。然しロータリアン一人一人の人間錬成という任務を忘れた大乗的奉仕活動は、やがてロータリーを内部から崩壊させることになるでしょう。今こそ人作りという原点に還るべきです。

大変言い難いことを申し上げました。「臭いものに蓋をする」というのが、日本の習性ですから、今私の申し上げたことには恐らく抵抗があるでしょう。然し、臭いものに蓋をして一時しのぎの対策で誤魔化して来た為に、今日本の政治・経済は容易に立直れない程の深刻な事態に陥ってしまいました。ロータリーをそこまで墮としめたくないから、敢えて私は直言し、皆様の奮起をお願いする次第です。

先程お話ししたロビンスR・I会長は、「黙っていては駄目だ。良いことは良い。悪いことは悪いとはっきり言いなさい。理事が言おうと会長が言おうと、間違っ

いることは間違っている……皆さんは自分の責任に於て自分の頭で判断しなさい」と我々を叱咤激励しました。ロータリーの寛容とは「臭いものに蓋をしろ」と言うことではないでしょう。「長いものに巻かれろ」ということでもないでしょう――

指導者の資格

経済界の不祥事や青少年の不良化が目にあまる様になって、また儒教道徳が見直されてきた。然し社会混乱のすべての責任は結局指導者層たる上部にある。支配者、指導者の席にその人を得なければ、どんな説法をしても無駄である。

そこで帝王学に儒教の古典が使われるのだが、学者先生の講義は抽象的な道徳論に片寄っていて、聖賢が身をもって行った実践例に乏しい。

老子の様に現世逃避ではなく、実際に政治に志し、帝王に仕えて行政の実務に携った孔子の実例を一つ紹介しよう。『孟子』と同年代に出た『荀子』という本に出ている話である。忠恕〓寛容ということを信条にした孔子が弱者に対して慈愛深かった反面、上に立つ者に対して如何に厳しかったかを示す好例で、今私達が大いに

反省しなければならぬ問題がここにある——

孔子も永年の志を遂げて魯の国の宰相になった。ところが就任早々にやったことが何とも凄い。このあたりが今の日本の大臣とは大いに違う。朝廷に出仕して僅か七日目に、当時割合世評の良かった高官の一人、少正卯を逮捕して死刑にしてしまったのである。門人共が驚いて、あんな有名な人を誅殺してしまふとはひどいじゃありませんか。先生の重大失敗になりましたよと言ってきたのだが、これに対して孔子はこう答えたという——

「まあ坐れ：これからお前達によくよくその理由を説いて聞かせよう。人間としてあってはならぬ極悪の事が五つある。泥棒はその中に入らない。泥棒などこれに較べればたいした悪事ではない。それは何かというと、先ず第一に、非常によく気が付くが、実は気がきき過ぎて心が陰険である。第二に、やることなすこと自分本位で頑固である。第三に、弁説巧みに出鱈目情報を流す。第四に、博学多識の様に見えるがその中身はいゝ加減で醜悪なものである。第五に、悪いことをしながら一

向改めようとせず、逆に上手に言いくるめて何時でも自分を正当化しようとする。

この五つの中一つでもあつたら死罪に相当するのだ。ところが少正卯はこの五悪全部を備えている。だから彼はいゝ加減な取巻連を集めて徒党を組み、邪心を甘言で修飾して人を惑わし、話の本筋を捩じ曲げて理屈をこね相手を打ち負かす。これこそ小人中の小人Ⅱ巨悪の代表であつて、これを誅殺しなかつたら大変なことになる。先例を引けば、殷の湯王は尹諧を誅殺し、周の文王は潘止を誅殺し、周公旦は管叔を誅殺、更にまた齊の太公望呂尚は華仕を、同じく齊の宰相管仲は付里乙を、鄭の大夫子産は鄧析と史付を誅殺した。この七人はそれぞれ時代は違ふけれど、何れも皆先に擧げた五つの悪い根性を持っていたからである。こういう奸邪の巨魁が居ては正しい政治が出来ない。『詩経』にある様に――憂心悄悄羣小に慍いる――というのが私の眞情だ……”

五悪の奸に較べれば、賄賂などまだまだ罪が軽い。五悪の人は組織を内部から崩

壊させる。

当面する政治経済の混迷も犯罪の多発も、由つて来たる所は五惡に鈍感な現代日本の体質にある。

ロータリーでも同じことが言える。拡大増強をあまりに急げば、時には本来ロータリーにふさわしくない人まで入つて来る。ロータリーは人生学校としてそういう人でも教化して良きロータリアンに育てようというのだから、その限りに於ては、「増強」や「寛容」という建前に敢えて反対しない。

然し、その理想を実現する為には、やはり孔子の様に、上層部に対して厳正でなければならぬ。ガバナーの資格として、第一に指導力という条件が擧げられているが、指導力とは口先だけの話術や文章力を言うのではない。それも必要だが、それは第二義、第三義の問題で、指導力の基本は、その人個人に備わつた日常普段の生活姿勢にある。別に聖人君子であれとは望まない、平凡な常識人であればいゝのだ。然し孔子の擧げた五つの悪い根性が一つでもあつたら、そんな人は絶対にガバ

ナー等にすべきでない。それは、どの一つでも皆「四つのテスト」に反するからである。殊に万一そんな人がガバナーになり、その後パスト・ガバナーとしてR・Iの役職にでも任命される様になれば、良識のある善人はロータリーに絶望して去つてゆく……結局ロータリーは内部から朽ちて崩壊するだろう。

現今の情勢から見て、衆人に抜きんでた才能など望んでも意味が無いけれど、少くもガバナーは全人格に於て「四つのテスト」を体現している人でなければならぬ。またガバナーが、地区に於て役職者を選任するに当たって、採点規準にすべきものさしもこの「四つのテスト」を措いて外に無い。



蒼天一炷香
—自作陶印—

青い大空の下・広い野原の中に一本の
線香が立っている・たった一本の細い
小さな線香・誰も気付かず通り過ぎて
しまう・然しあたりに何かいゝ匂いが
漂っている……誰一人見向いてくれな
くても線香は独りひっそりと燃え続け
る・そしてかすかにいゝ香りを残して
消えてゆく……

あとがき

この度、市川東ロータリークラブ創立三十周年記念式典特別企画として国際ロータリー第二五八〇地区佐藤千壽・パスト・ガバナーに「人作りロータリー」と題して講演をご依頼致しましたところ、副題を「ロータリーに於ける大乘の道・小乗の道」と補足され、早速快諾を頂戴致しました。実のところ思いも寄らぬ大乘の道、小乗の道に少なからず戸惑いを禁じ得ませんでした。講演は『釈尊の教えに従い、戒律を忠実に守る小乗』に対し『大衆に教えを広める為には時代と共に戒律をも変えなければならぬとする大乘』を引用され、大乘仏教の現状とロータリーの姿を對比され、大乘ロータリーの行く末を危惧されました。続けてロータリーに於ける大乘、小乗の議論は偉大な先人達の折衷案・決議二二三〜三四により見事に解決済であり、これぞロータリーの原点であると看破されておられます。明日のロータリー発展の

為に、敢えて少数派と自認しながらも痛烈な勧告をなされ、最後に「敬愛する諸兄に贈る遺典となるでしょう」と結んでおられます。しかし私共が観望するところ、まだまだ日頃からかくしやく矚としておられますので、今後とも私たちを折にふれて大喝、叱咤して下さい様お願い致します。

此処に、佐藤千壽パスト・ガバナーのご了承を得て、「ロータリーに於ける大乘の道・小乗の道」の追録として「指導者の資格」という一文と「表紙の装画——仏教発祥の地インドから南進した小乗仏教伝播の海路を意味する東南アジアの海辺、一方大乘仏教の天山山脈を遠望する峻嶮な陸路——」まで併せてご惠贈頂き、創立三〇周年記念事業の一環として上梓する運びとなりました。

多くのロータリアンの皆さんにとって、ロータリー再興の道を模索する道標となります様希求しご挨拶と致します。

平成十年大暑

国際ロータリー第二七九〇地区

パスト・ガバナー 土屋 亮平 敬白

ロータリーに於ける
大乘の道・小乗の道

発行日 一九九八年七月吉日

著者 佐藤 千壽

〔Ri第二五八〇地区バスタガバナー〕
〔Ri在日文献翻訳諮問委員〕

発行者 国際ロータリー第二七九〇地区

市川東ロータリークラブ

創立三十周年記念実行委員会

市川市南八幡二一二一

TEL〇四七(三七七)五二三九

FAX〇四七(三七〇)四六六五

印刷所 株式会社 集 賛 舎



市川東ロータリー・クラブ
創立三十周年記念講演

07